

詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第3号
2013年3月

目次

高間かさね	明るいほうへ	1
	きみに借りた	2
	夢・銀河鉄道	3
朝倉さやか	眠りにおちて	4
	赤い呼び声	6
	夜路	7
伊東友乃	レモンひとつぶん	8
	やさしい愛の切れはし	9
	なん	10
熊谷めぐみ	救い	12
	時は満ちて	13
	そして辿り着く	14
栗山佳織	ベルリンの雪	16
	プール・ド・ネージュ	18
	家族	20
関根全宏	停留所にて	21
	待合室	22
	触れることができない	23
当津宏昭	シースルー・エレベーター	24
	マスター・ピース	25
	小麦粉	26
戸張雅登	ヤコブの梯子	27
	朽ちゆく体は何も語らず	28
	ジョン・ゴールトはどこへ行った？	29
渡辺信二	空のつぶやき—TWITTER から	30
	天気雨	31
	雪国の空	32

明るいほうへ

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

きみに借りた

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

夢・銀河鉄道

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

眠りにおちて

朝倉さやか

木陰で うたたね
胸元に抱く 一通の手紙

花曇り

風が吹くと
空は花にとけて
さかいは曖昧

ゆらり春風
うぐいすの歌
胸元に舞いおりた 天女が
ささやきかける

風にさらわれていく羽衣——手紙
「桜のころに帰ります」
色あせた言葉たち
懐かしい夢

残された 一枚の花びら
もう戻らない
あなた

赤い呼び声

朝倉さやか

一目ぼれして買った 赤いハイヒール
燃えるようなこの赤
あの秋の 楓の葉――

庭園 無数の楓の木
幹 また幹 隙間を埋める 赤
頭上 足元 赤く霞む

――声を聞いたのだ そのとき
誰もいないはずの 庭園で
鮮やかに 私の名を呼ぶ声を
そう あの声は――

――けれど まだ出逢う前のこと
赤いハイヒール
あの秋の 楓の葉
私がこれから 会うひと

夜路

朝倉さやか

雨の降る夜 扉がひらく

雨の降る夜 闇がおりる

月星は隠れ

虫は黙りこみ

酒呑みも 遊ばない

雨の降る夜 立ち上るのは

むせかえるほどの

土の匂い 草の匂い

そして流れる水の匂い

雨の降る夜 あの娘を呼ぶのは

軒を滴る 粒の音

傘をたたく 雨の音

合図と伝えた 鈴の音

雨の降る夜 扉がひらく

レモンひとつぶん

伊東友乃

こんなにも
わたしが 愛おしげに
あなたのからだにめぐる
こぼこぼとした 血の音に
耳をそばだてているのに
やすやすと
わたしから 抜けだして
あなたは
もといた 青空へ
帰っていかうとするのだ
やわらかい重力と
あたたかく濡れた羽と
レモンひとつぶんの
からっぽを わたしに残して

やさしい愛の切れはし

伊東友乃

ときおり 世界のかどっこで
やさしい愛の切れはしに
出会うことがある
誰にも届かなくて
すこおし残念がられたけれど
思い出とともに捨てられた
愛の切れはしだ
からっぽのグラスのよこや
日干しされた傘のうえ
空におよぐ鯉のぼりのなかなどで
とくに お天気の良い日には
ふかふかの真綿のように まっしろに
つぎの やさしいところをまっている

なん

伊東友乃

さいごは　とろけてしまいそうな　終わりがよい
さきつぽが　しゅん　となくなるような
ことばを　きゅうくつにしてはいけない
いいたいことが　たくさんあっても
きゅうくつすぎると

ことばは　壊れる

だから　あまり　をいつも　浮かべておく
あまり　のなかで　ちやぶちやぶ　と

ことばも　ゆれる

その　内包される

不安定さのなかで

ことばは　はじめて

ヒダをのばす

かたくなるしい　ことばをつかう　とき

たとえば　難

いっせいにあつまった　蟻　たちのような

いかめしい　おじいさんの　顔　のような

難
難
難

こういうことばには

紙も食われてしまう

だから 難を ひらがなに

なん

春のさいしよの日に あそんでいる ことばに なる

救い

熊谷めぐみ

痩せ細ったからだ
青白い肌の子供が
殺人を犯した

子供は裁かれる
社会に世間に神の目に

法の裁きは与えられず
反論の機会は得られない

同情がどちらに向けられても
殺された人は還らない

子供は
救いを求める
神様

僕を生まれる前に戻してください
幸せを知っていたあのころに

時は満ちて

熊谷めぐみ

時は満ちて

僕はあなたのそばにいる

この瞬間は儚くて

明日には脆く崩れるかもしれない

いびつな僕たちは

正反対が故に求め合った

傷つけ合いながら

互いを手放せなかった

存在自体が矛盾だとしても

僕を切り離さなかった

孤独な背中を信じた

疲れた肩を僕にさらして

最後の時まで

そばにいるから

そして辿り着く

熊谷めぐみ

気まづくて目を逸らすと

私は宇宙

人から離れてどこまでも飛んで行く

ふわりと浮かんで

始めは孤独がいい心地

争いも嫉妬も空の向こう側へ

私を包む漆黒のゆりかご

人の目も気にならない宇宙で

体も心も解き放たれる

穏やかな時は続く

それなのに

三日もすれば私は必死で手を伸ばす

どこかに地球に繋がるロープがあるはずだ

絶望が希望を駆逐しても

ぐちゃぐちゃな世界に繋がる手がかりを探し続ける

声がする方へ

地球へ地球へ

ベルリンの雪

栗山佳織

手帳の端に書いた長い番号をダイヤルすると
聞きなれないイントネーションで彼女は名乗る

「Renata」

わたしはできるだけ大きな声で

「レナタ？」と返す

遠く離れたベルリンで雪は街一面に積もり

受話器から聞こえるレナタの声も

いつもより少しだけ小さい

活動的な気分にはなれないし

歩道がどこかわからないくらい雪は積もっているし

一日中家にいるの　と彼女は言う

夜勤のこと　彼のこと　痛みが取れない背中のこと

何年も会っていないと

問診票の空欄を埋めるように

お互いのことを確認する

そして最後には必ず

「いつベルリンへ来てくれる？」という問い

先のことが宙ぶりんで
わたしはいつも答えに困る

「まだ降ってる？」と聞くと

「ぜんぜん止まないね」と言う

わたしも深々とした雪を見た気になって溜息をつく

ベルリンを覆う雪は

わたしたちの呼吸音まで吸い込んで

いっそう静かだ

ブルー・ド・ネージュ

栗山佳織

夫の歯にクッキーが碎かれる

実家の母が野菜や味噌といっしょに新居へ送ってくれた

わたしの大好きなクッキーが

崩れそうな本の山から薄汚れたのを一冊取り

ぬるいコーヒーを飲みながら

ページを開き、鼻を吸る夫の歯に

碎かれる、

黒糖入りのブルー・ド・ネージュが

ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、

指先をこすり合わせ

粉砂糖をテーブルの上で払い落とす

ページの端には

バターじみた母印がスタンプされる

そしてその手で頭を掻くのだ

夫と目が合う

鳩のような顔で

「食べないの？」と聞いてくる

やさしい気持ちも散らかつて

「いない」と言うとき全部食べてしまった

テーブルの上にはクッキーの残骸が

母と夫とわたしの間を

点々と結ばずにいる

家族

栗山佳織

空は曇り 灰色の波が畝っていた一九八五年の夏
あの日は到底 海水浴などできる日ではなかった
泣きじやくるわたしと苛立つ父
三歳に満たない妹だけが笑顔で写っている

あの日から何十年も経つのに 母はこの写真を今も寝室に飾っている
気難しい夫と手のかかる二人の娘たち
なぜ母がこの写真を選んだのか わたしにはわからない
わからないということが
生え揃わない五歳のわたしの歯の暗がりの中へ
今もわたしを引き寄せていく

シャッターボタンを押したとき
母はこんなふうに時が過ぎるなんて 思いもしなかっただろう
家族がみんな元気で そして少しずつ娘たちが自分を必要としなくなり
夫が自分を頼りに生きるようになるなんて
考えられないほど若かった
母の家族の写真

停留所にて

関根全宏

牡丹雪が降る朝
女は瞳を濡らし
老婆は腰を曲げ
犬は白い息を吐く

車内にぽつんとある
五つの頭
そのうちの一つが
こちらを向いた

けれども私は気にも留めず
窓に指でまるを描いた
そしてそのまるの中で
過去が点になっていった

死ぬわけではあるまいし
まるが動いた 気がした
と

待合室

関根全宏

聞こえてくる
歯を削る音に
私の歯は疼き
左手で頬を覆った

そのうち
前に座る男の耳が
内臓に見え
次第に黒い異臭を放ち
朽ち果てた

ああ
それが生の証か
ふと気づくと
女が私の名前を
呼んでいた

触れることができない

関根全宏

触れることができない

人の形

ガラスの向こう側にある

天使のような羽

なめらかな手触り

懐かしい温もり

この手の記憶

けれどもそれは

存在しなかった

過去の虚像

儚い憧憬

錯覚

本物の手は

流れる涙を拭うことさえ放棄している

シースルー・エレベーター

当津宏昭

ガラス張りのエレベーター二人で乗り込んで

1のボタンだけ押してドアが閉まるのを少し待つ

外は雨ガラスが曇ってシースルー・エレベーターとは名ばかりになる

やや小柄なあなたが窓に両手を当てて

水滴の壁を見つめている

その眼に何が映っているのか

その奥に何が宿っているのか

白く包まれたゴンドラの中聞こえないように溜息をつく

シースルー・エレベーターとは名ばかりで

何一つ見通せやしない

外の景色も人の心も

だからこそ人は知りたくなるもの

下らないことを考えている間に

二人そろって地上に降り立つ

マスター・ピース

当津宏昭

三日前まで蔦に覆われていた煉瓦の壁が
今じゃどうだ すっかり裸になっちまった
一枚残らず この嵐が持っていきやがった
最後の葉が落ちれば自分も死ぬと
あの馬鹿娘は言うそうだ

この体が小刻みに震えるのはなぜか
下らん！そんな戯言を真に受けるものか

心配するな この大芸術家が甦らせよう
木炭は折れ パン屑は湿る
イーゼルカンバス役にも立たん

黄色と緑の油絵具を 震える絵筆に染み込ませ
脳裏に写る最後の一葉 最初の一筆 命を吹き込む

あの馬鹿娘 ようく見やがれ
最高傑作が生まれるぞ！

小麦粉

当津宏昭

「家の手伝い」という厄介な宿題に

我が子を選んだのは夕食の準備

ポークソーテーでも作ってみるか

バットに小麦粉を散らし 豚肉にまぶす

加減を知らない幼い力は たちまち表面を覆ってしまふ

「このままだと火が通らないね」と私は肩をすくめ

ひと切れずつつまんで粉をはたく

舞い散る小麦粉を見つめ 「雪みたいだね」と呟く我が子

見よう見まねで粉を落とす

バットからはみ出た小麦粉は 茶色いテーブルをほんのりと染める

後片付けが手間になる だけど確かに美しい 密かに私も頷きながら目を細める

ふと横を見やれば 白く薄化粧した小さなシェフの顔

まずいと思ったときはすでに遅く くしゃみを堪えきれない

後片付けは大変だ それでも 舞う小麦粉は美しい

ヤコブの梯子

戸張雅登

子どもたちが戻ってきた
僕を呼ぶ声 駆けてくる小さな人影

高く掲げられた網に向かって

ボールを投げる少年たち

輪ゴムをつなげて縄跳びをする少女

そして僕の腕を行き来するミニカー

ジェームズが僕の裾を引っ張った

無言で指さす先には 暮れていく空

天からのハイウェイが

真っ直ぐ地上に伸びていて

鳥たちはそれを避けるように飛んでいた

僕らは知っている ここが約束の地

塀の向こうでは 罪の自覚なき盗人が

薄暗い路地を這いまわっている

朽ちゆく体は何も語らず

戸張雅登

朽ちゆく体は何も語らず 腐臭をはなつ
生まれ育った草原は 焼き払われて
黒く汚れた地面が残った

半壊した家の中で
母が割れた食器を並べている
炭化した床の下には倉庫があつて
焦げた豚肉が吊るされている

僕は今日の糧を求めて川へ向かう
焼け落ちた橋の下流で釣り糸を垂らす
流れが弱く淀んだ場所でコイを待つが
かかったのは 白くて大きな かたまり
魚と同じ目をして僕を見ている

食えない奴らを片付けて 村が戻れば
クロウタドリも鳴き出すだろうか

ジョン・ゴルトはどこへ行つた？

戸張雅登

ガラスの壁に映る僕の瞳は

かつて夢見た世界を見つめている

空飛ぶ自動車はないけれど

万能ツールを片手にした若者たちが

水晶宮殿を行き来する

飢餓といくさは根絶されて

働かずして食うもの続出

面倒を見るのはビッグブラザー

深夜に煌々と輝く便利屋で補給をしたら

自室に備えた光の箱から世界へアクセス

「ようこそ未来社会へ」

自由と平等の洞穴に放たれた鳥の多くは

羽ばたけずに 暗闇の中で墜落したが

統計上の数字に過ぎないと

役人はファイルを閉じた

空のつぶやき

——TWITTERから

渡辺信二

「放射能に 赤い色がついていればなあ」
ハンドルネームSO SORAがそう呟いた
「そしたら 燃えるような赤い野原や
赤い森があちこちに見えるだろう」

世界の日没——

「野原や森だけでなく
すべてを染めていたらどうしよう？
この家も身体も手も髪も
かたわらの子が流す涙も」

同じ呟きが ツェランから聞こえる

「あの光 甲虫の世界が

ぼくの手の傍らを落下する

ぼくの友だち ぼくの眠るものたち——

ぼくの赤い国は どこへ傾いてゆくのだろうか」

天気雨

渡辺信二

空から降るのは今　オタマジャクシではありませんが
あの頃はまだ　おれたち　澄み切ったほんとうの空
5月　国道252号線の水沼橋を渡って　左折
川沿いに　上りの坂道を　400ゝ500m走ると

先の緩やかなカーブが右左に分かれる
その辺りに路駐し　右に200mほど歩き
左の林に入る　けもの道がある
腰を屈め　鈴を鳴らして

45分ほど上り道を行けば
ふいに視界が開け　只見川と鉄橋　そして
蒸気機関車の走る絶景撮影スポットでした
時折　水面をあや織りに　風が走る

そこがお墓のそばなのに　気づかず
空を上にして下にして

二人で野原をはしゃいだので
時たま　気難しい天気雨が降りました

雪国の空

渡辺信二

道ばたに積み上げた雪より高く
父に「高い高い」と持ち上げられて
ぼくは 見た
一瞬のぼうぼうとした雪原が
大きな空の下に広がっていた

あれから7年

父は 仕事がうまく行かず
息子たちに当たった そして死んだ
ぼくら 人形のように
床に転がって 泣いた

—— 今日もまた雪だ

まだ降り止まない
あの時から ぼくらの空のどこかに
大きな穴があいているのだろう

詩誌 立彩 第3号 2013年3月18日 頒価 800円

編集発行所 「立彩」

〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園 4-5-3

フェリス女学院大学文学部英米文学科 渡辺信二研究室気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311